

## おまじない

「痛い、痛い、飛んで行け。もう大丈夫よ。痛い、飛んで行っちゃったでしょう」

と若いお母さん。そう言いながら、しつかり傷を見て確かめている。「フウ、フウ」とお母さんから温かい息を吹きかけられ、優しい「痛い、飛んで行け」のお呪いで安心顔の孫は、また遊びに熱中する。私は、そこに現在も生きているお呪いを見つけた。

「酒屋へ三里……」の山里は、お医者様へも二里、三里である。そこに生まれた私は呪いだらけで育った。

「目にゴミが入ったやあ。泣け！ 泣いたらゴミが出る。目をこするなよ」

ジイジイはいきなり杖で尻をぶった。いきなりでは痛い呪いであった。

「ゴミが目に入ったらの、こすりまんや。すぐ目をつぶって、右目なら左、左目なら右の頬つぺたの内側を舌でなめながら」

『ゴミ様、ゴミ様、お出んさんせ』

と、三回言うてみいさん。ゴミ様は涙と一緒に出てくるけえ」

——「目にゴミが入ったらこすらずに涙で流せ」という隣りのおばさんに教わった優しいお呪い。私は今も、しつかり守り続けている呪いである。

「目イボ」は「ものもらい」とも言っていた。

「良っちゃん」「目イボ」ができたら、どのお呪いにする」

と、ヒサちゃんが聞いた。

「私は背戸のおばばにする。」「目イボ」ができると、近所の三軒から物を貰うて歩くと治ると言うたけえネ」

すると

「私もその呪いにするけえ、目イボが良っちゃんと一緒にできたらうれしいネ。物をもろうて歩こうやあ」

と、約束したのだが、今もって果たせないままである。

「目イボ」については、他に

「目イボができると井戸にのぞいて、目に小豆を一



粒当て『小豆かと思うたら、目イボじゃった』と言  
うて、小豆を井戸の中に落とすと治る」

「つげの櫛くしを火にあぶって暖め、目イボを櫛の背で  
こすると治る」……とも。

また、鹿野町・渋川にある眼観音様へ、半紙に自  
分の年の数だけ「め」の字を書き、おしまいに生ま  
れた年の干支えとと性別を書いて奉納すると目の病いが  
治る。目イボは、年の数だけ小豆を半紙に包んでお  
供えし、拝んで持ち帰り小豆飯にして頂くと治る。

という話も聞かされた。

更にまた、子供の夜泣きや咳の止まらない時は、荒  
神様へ鶏の絵を描いてお供えすると治る。父はそう  
してみたが、末っ子の妹の夜泣きは止まらなかつ  
た。

「猿沢の、池のほとりに鳴く狐、あの子泣かせて、  
この子泣かすな。頼む、たのむ、頼みまする」

と書いた半紙を、妹の寝床の下に敷いた。するとそ  
の夜から不思議と妹の夜泣きが止まった。そのお呪  
いは、祖父が旅先から教わって帰ったものであつ  
た。夜泣きに困っていた父と母は、

「やっぱりお呪いは効き目があるんじゃないかか」  
と、しみじみ話していた。

その他にも「魚のイギ（小骨）が喉に刺さった」  
——というと、すぐさま頭の上に大骨を載せる。す  
ると不思議、本当に小骨は取れるのだから……。

「フウ、フウ、治ったよ。痛いの飛んで行け！」

——このお呪い、いつまでも続いてほしい。